

始良市特産品協会 会員インタビュー

茶句庭ながの 様



「花月堂」から「茶句庭ながの」へ

蒲生町北に所在する「茶句庭ながの」様を訪ねた。そのルーツは明治時代にさかのぼる老舗のお菓子屋さんである。四代目の永野浩幸さんに話を伺った。

お店の屋号「茶句庭ながの」さんの「茶句庭（さくてい）」は、永野さんの造語でしょうか。漢字からはお茶の「茶」、俳句の「句」、そして「庭」を連想させます。お名前の由来を教えてください。

「もともと蒲生の街中で花月堂というお菓子屋をしていました。私は四代目ですが、場所を今のところに移転するとき「花月堂」という創業時からの名前に対して、それが果たして現代の若い方々にも通用するのだろうかという疑問がわいてきました。

歴史のある名前じゃないですか、と周りからは言われましたが、歴史があっても・・・。

歴史があるうがなかるうが、今の若い方々は美味しければその店に行くし、歴史があっても美味しくないところには行かない。」

このような思いから、永野さんは苗字の「ながの」をひらがなでそのまま残したうえで、初めて移転候補場所の土地をみたときに感じた「お茶が飲めて、景色を楽しめて、語らうことができて」というイメージを浮かべることのできる名前をつけたいと考えようになったという。

「イトインのできるお店をつくりたい。それを最初から思っていました。ここに移転した一番の理由です。」

以前の場所はイトインがなかったのですか？

「なかったのです。駐車場もありませんでした。四代目として引き継ぐことにはなったけど、この先の経営を考えるとどこかに出るしかないと思って、僕はずっと今の場所に目を付けていたんです。」

この辺りは周りに民家もありません。ここから眺める広大な農地を「広い庭」と見立てて、この景色を楽しんでほしいという思いがありました。」



春先には、れんげの花が一面できれいに咲くでしょうね。

「れんげの花の後は、田植えがあって、稲刈りがあって……。田植えの時期、水が張っているときは、ガラス張りのような感じになり、向こう側の山が逆さに映るんです。」

また、稲刈りの前は、稲の色で辺り全体が黄金色です。そのときどきの季節を感じることでできる風景が楽しめますよ。」

長年「花月堂」として親しまれている屋号を変更することに対して、周囲の反応はいかがでしたか。

「もう、親戚一同、全員反対でした（笑）。でも、地元の人には「花月堂」を知っているけど、地元以外の人には「花月堂」を知らないわけですよ。移転して心機一転という思いを胸に、最後は納得してもらいましたね。」

ひらがなで「ながの」というのを屋号に入れたいということと、景色を愛でるイトインの構想は最初から念頭にあったと仰っていましたが、それがどのように「茶句庭」という言葉に結びついたのでしょうか。

「当初は「ながの」の前に「菓子工房」とかそういった名前を付ける案もありました。でも、喫茶のイメージを訴えたいとか、「石」という漢字を使いたいとかいろいろ考えて、相談もして、最終的には、「石」の字ではなく「庭」の字を入れて、「茶句庭ながの」という屋号になりました。平成16年でした。」

「茶句庭ながの」屋号変更の背景

お店の移転、屋号変更の背景には、今後の経営への不安があったとのことですが、四代目として当時の花月堂を継がれたときの状況はどのようなものだったのでしょうか。

「今は少なくなってきましたが、昔の葬式は、その集落の方々が主体となって行っていました。集落としてみんなで加勢して、そこでカステラの注文が200人分とか、集落の単位で注文が来ていました。だから、葬式が2、3件あると400～600人分の注文になるわけです。そうすると、店頭の仕事は中断してそれらの注文の分だけをつくらないといけない状況になるくらいでした。

ただ、時代も変わってきて、葬儀自体を外部に頼むことが主流となってくると、これらの注文が減ってきました。「みなさんに手伝っていただくのも申し訳ないので、もうお葬式は葬儀屋さんにお願いますから加勢はいただかなくても大丈夫ですよ。」という流れになってきたんですね。

これからは、待っていても注文は来なくなるだろう。かといって、当時の場所では待っていてもお客さんが来てくれるような立地ではない、ということで移転を検討するようになりました。」

もともと売上の大きな部分を葬儀関係が占めていたのですか。

「そうですね。葬式があれば、四十九日があり、一周忌がありでその後も続くわけです。それがぱったりなくなってしまうわけです。けれど、当時の場所は、蒲生に住んでいる人以外の方々が通るような場所ではなかった。蒲生に菓子店があること自体が知られていなかった。それでどこかに出ようという気になった。それがきっかけですね。」

田園の菓子職人が優しさと美味しさをお届けします

茶句庭ながのさんのホームページには「田園の菓子職人が優しさと美味しさをお届けします」というフレーズがあります。

これまでのお話からも「田園」という言葉はキーワードなのかなと感じるのですが、この単語に対して思い入れがあったのでしょうか。

「自分自身はなかったのですが、インターネット通販を始めるにあたって、田んぼの写真を都会の人にアピールしようと思ったんです。

その頃、地元の高校を出て音大に通っている学生の方たちが、夏休みで鹿児島島に帰って来られていて、こちらのイトインのスペースを使ってミニ・コンサートをしてくれることになっていました。

ミニ・コンサートの名前をどうするか考えているときに、そうだ、田園コンサートにしよう！ということになって、田園！これを前面に出していこうとなり、それから使うようにしています。田舎の職人



が、というより、田園の職人が、のほうが聞こえが良いですよ（笑）。」



明治40年創業 東京にも進出

茶句庭ながのさんの前身、花月堂はもともと都城でスタートされています。その後、東京支店も出されていますね。創業時のお話を聞かせてください。

「明治40年に初代が都城で創業しました。順調に事業も進み、東京支店も出しましたが、関東大震災の影響もあり、都城のみの店舗に戻ったようです。」

チラシには「鹿児島市内に開業計画途中、現在の蒲生町住民と出会い、蒲生町に開業することとなる」と記載があります。この点をもう少し詳しく教えてください。

「当時の蒲生町に来たのは大正13年です。長男が本店を継いで、次男が支店を創りました。」

都城が本店で、蒲生に支店を創られたということですか。

「いえいえ、2店舗とも蒲生です。都城の本店のほうは、最初はすごく繁盛していて、その影響で初代はけっこう遊んでしまうようになったみたいです（笑）。結局潰れてしまった。」

それで逃げるように東京に行って、東京で一旗揚げようということでお店を出したけど、関東大震災でこれもまた潰れてしまった。

今度は鹿児島市内で店を開こうと思って都城に帰ってきて、鹿児島市内を調べるために汽車に乗ったら帖佐駅で乗客に「どこに行くの?」と聞かれて、実は鹿児島市内でお菓子屋を開こうと思っているんですと話したら「私は蒲生というところにいるんだけど、蒲生にはお菓子屋さんがないから蒲生であればいいのではないか。」という話をもらい、それがきっかけで蒲生にお店を開くことになったようです。」

車内でたまたま会話したことが、蒲生に店を構えることにつながったのですね。

「はい。それで見に行ったら蒲生がすごく栄えていた。市が開かれるときは歩けないくらいの人が多さだったようです。こうして蒲生で始めることになりました。同じ町の中で本店と支店を出していたということは、相当好調だったのだと思いますね。

ただ、時が経って本店はなくなり、支店だけが残りました。そこに嫁いできたのが私の祖母、蒲生町北の生まれです。そして、私の父が生まれて、私がいる。こういう流れです。」

浩幸さんのおばあさんの旦那さんが二代目ということですね。ひいおじいさん、おじいさん、お父さん、浩幸さんと、初代から四代目まで、ずっと父子でつながっているんですね。

上海支店も出店 行動力に溢れる先代たち

茶句庭ながのさんのホームページには、二代目が開いた上海支店の写真が掲載されている。初代は東京進出、二代目は上海進出。行動力の血筋が窺える。

「やり手だったのでしょうか。実行力があつた。この写真、周りに写っている方々は現地の従業員の方々です。鹿児島花月堂上海支店。終戦のときは、着の身着のまま逃げのように帰ってきたみたいです。」



ケーキデコレーション

茶句庭ながのさんのお店の特徴のひとつとして、ケーキデコレーションがあるかと思います。キャラクター、似顔絵、立体デコレーション、立体、特注・・・、さまざまですね。

「絵を描くのはもともと好きでしたが、お菓자에描くとなると大変だということが分かっていたから、自分からやりたいとは思っていませんでした。でも、お客さんから尋ねられることが多くなってきて、逃げ切れなくなりましたね（笑）。

娘さんが阪神ファンだという子のお母さんから、虎の絵を描いてほしい、と依頼されて描いたのが最初でした。それがだんだん広まっていて、描くのが難しいキャラクターも頼まれるようになってきました。」

どのくらいの頻度で注文がありますか。

「週に3件入るときもあります。今はみなさんSNSに写真を載せるでしょう。それを見た方が、このお菓子どこで買ったの？という話になるみたいです。そのため、もともとは馴染みのなかったお客さんからの注文が多いです。」

ホームページを見ると、本当にたくさんのキャラクターを描いておられる。子どもに定番のものから最近のアニメや漫画のキャラクターまで幅広い。

「自分は別にキャラクターとかに詳しいわけではないから、依頼があつたらまずネットで検索して、ああこれのことか、と描きはじめます。最近のは難しいですよ。

髪の色が違うと言われたから、では何色なのですかと聞くと、いや私もよく分からないんです、孫に頼まれたものだから、というやりとりのときもあります（笑）。

そんなときは、何とか正しいのを見つけて、「ああ、これこれ！この色！」みたいな感じですよ。似顔絵のときは、事前に写真を送ってもらったりするのでこういうことはないのですけれどね。」

幼い頃からプラモデルや塗り絵などが好きだったという永野さん。「手を使うことが好き」で「なんでも試してみるのが好き」な性分だという。

若き修行時代 田園の菓子職人になるまで

浩幸さんが菓子職人になるまでの経緯を教えてください。

「祖母から「跡を継ぐんだよ」と言われ続けて育ちました。もうインプットされてましたね。だから、中学校、高校でも何の目標もなかったですよ。後を継ぐものだと自分で思っていましたから。」

高校卒業後に浩幸さんは東京の菓子専門学校に進学した。ご自身はすぐにでも修行に行きたい気持ちがあったが、修行はいつでも行けるからとりあえず学校で学んでみないかというお父様の進言により、東京生活を送ることとなった。

「だけど、学校の勉強が合わなくて……。『小麦の仕入は』みたいな学科の授業は退屈でした。」

実技の授業は面白かったが、次第に学科の授業への出席から足が遠のき始め、結局中退した。その結果、親からの仕送りも止まり、アルバイトを3つ掛け持ちしながら東京で生活していたという。

「そんな生活を1年くらい続けるうちに、このままではいけないと思うようになりました。今思えば、家にいつでも帰れるという甘えもあったと思う。でも、今のままでは帰れない。」

そこで浩幸さんは決心した。福岡にいる友達に、福岡で修行したいから地域でナンバーワンの洋菓子店を探してほしい、その店にすぐ面接に行くから近くのアパートも契約してほしいとの電話をし、翌朝、福岡に向かった。

この行動力も血筋なのだろうか。初代は東京、二代目は上海、そして浩幸さんは福岡。

「幸いその洋菓子店の社長はすぐ面接をしてくれました。そして明日から来るように言われました。まだ荷物も片付いていないので時間をくださいと言ったけど、そんなのはゆっくりすればいいじゃないか、とにかく明日から来なさい、ということで翌日から働き始めました。」

慌ただしく始まった福岡での生活。ただ、人気洋菓子店での修行は厳しいものであったという。

「朝5時に出勤して帰りは早ければ18時、遅ければ21時の生活でした。アパートは大濠公園の近くで、通勤には自転車ですら40分ほどでした。社長以下8人の菓子職人がいましたが、厳しい社長の下、退職者も多く、入れ替わりは激しかったです。そのため常に求人を出していました。周囲からは、あの店で3か月持てば良いほうだと評判になるくらいでした。」

スパルタ教育だったのですね。

「もう何回泣かされたか。厳しくて有名でしたよ。ちょっと配合間違いがあると目の前で全部捨てられるんです。こんなもの商品にならん！と。」

商品として提供することの厳しさを染み込ませたかったのでしょうか。それが教育だったのですが、当時はなぜ捨ててしまうのか、捨てなくてもいいのに……。という思いでした。」

辞めたいという気持ちになったことはありましたか。

「常に辞めたかったですよ。辞めるきっかけを毎日探していました。採用されたのは9月、それから3か月でクリスマスが来て注文が殺到。徹夜の日々でした。そのときに頑張ったのが評価されたのか、私は新人なのに他の先輩職人の方々よりも多額のボーナスをもらいました。それに不満だった先輩職人が複数退職してしまい、結果、これまで先輩がしていた責任者の立場を自分がやらざるをえなくなりました。

そして4月を迎えました。専門学校を卒業したばかりの新卒の人たちが新たに入社してきます。すると、どこかで見た顔だなと思っていたら、私が中退した専門学校の同級生でした。彼は新卒で入ってきたわけです。

「あれ、なんでオマエここにいるの!？」という話になりましたよ。その店は厳しくて有名ではあったけれど、その分確かな人気を誇った洋菓子店でしたので、九州の菓子店の跡継ぎ候補の子たちが修行として入社してきていたんですね。

なんで途中で専門学校を辞めた人間に、ちゃんと卒業した自分が頭を下げて教えてもらわないといけないのか、と笑いながら言われながら、一緒に修行しました。」



過酷な修行生活はさらに続く。

「自分より後から入ってきた職人も、どんどん辞めていきました。給料をもらうたびに「はい、ご苦労さん。明日から来なくて良いからね。」とクビを宣告されるのを間近に見るのです。胃が痛くなる毎日でした。仕事中は一切の私語禁止。材料を持ってきた業者の方が、あまりにシーンとしている現場をみて、今日はお通夜ですか、と言われるくらいの環境でした。」

そんなある日、先輩から、独立したいので付いてきてほしいとの話を持ちかけられた。焼き菓子を専門としていた先輩から、生菓子の部門の責任者として浩幸さんは請われた。悩んだ結果、浩幸さんは退社して先輩の店についていくことに決めた。

「好きなように作っていいと言われ、わくわくしたのを覚えています。」

しかし、洋菓子店がひしめく福岡での競争は激しく、先輩の店も長続きはしなかった。その後、しばらくして、浩幸さんは鹿児島に帰ることに決めた。

鹿児島の味、東京の味、福岡の味



「自分は鹿児島の味、東京の味、福岡の味、それぞれ学んだと思って帰ってきたけど、まだ家を継ぐほどの状態には達していないと思っていました。まだ親父も元気だったので、もう一回、鹿児島市内の菓子店で修行をさせてもらいました。そこで5年働き、結婚もして、そろそろ家を継がないといけないなということで、蒲生に帰ってきました。そのとき平成6年ですね。父からは、後はお前に任ずと言われました。

継いだは良いけど、葬式関係の注文ばかり。福岡で学んできたお菓子を出しても受けない。やはり、鹿児島の人たちに合わせた甘さ、大きさが重要なだと理解し始めました。」

福岡の味と鹿児島の味、どのような違いがありますか。

「福岡で修行していたときは、世の景気はバブル期。ケーキは小さくて、かつ、値段が高いものが売れていました。また、あっさりしたものが人気がありましたがそれをそのまま鹿児島で出したら、美味しくない、甘くないになってしまうわけです。

濃厚チーズのお菓子をつくったら、お客さんから腐っているぞと言われたこともあります（笑）。」

実はサッカー少年だった

インタビューをさせてもらっている店内の壁には、鹿児島ユナイテッドFCに所属するサッカー選手のユニフォームがいくつも飾られている。

実は浩幸さん、鹿児島実業高校にサッカー推薦で入学したほど、学生時代はサッカーに打ち込んだ。

「蒲生小学校のときからサッカーに夢中でした。高校までは、帖佐駅までバイクで行って、それから電車に乗って通学するつもりだったけど、監督の自宅に下宿するように言われ、3年間下宿生活をしました。

監督は自分の選考の電気科の先生でもあったから、もう朝から晩まで一緒ですよ。「おはようございます」から「ただいま」までずーっと一緒。おかげさまで3年間皆勤でした。

風邪を引いても下宿にいては落ち着かないから、そういうときは練習しないで部室にいたり、通常の練習が終わっても、すぐ帰宅すると監督に指摘されるから自主練習したり、帰ってきて洗濯やら何やらで寝るのも遅くなったりで、もう地獄でしたよ。」



浩幸さんは笑いながらサッカー漬けの青春時代を振り返った。飾られているユニフォームは、サッカー選手として活躍する後輩たちとの交流を物語っている。

「茶句庭ながの」にしかできないお菓子づくり

始良市にも大型ショッピングセンターや全国展開している洋菓子店などの参入が相次いでいる。どのように捉えているのだろうか。



「茶句庭ながのにしかできないお菓子づくりをしていく必要がありますね。他と同じケーキを作るのではなく、うちにしかできないものをつくってほしい。」

「今取り組んでいるのは、その昔二代目が考案した大楠餅です。蒲生に来たらコレという商品をつくっています。」

加治木なら加治木饅頭、蒲生なら大楠餅となるように、でしょうか。

「そうですね。大楠餅、大楠パイ、大楠最中、太鼓坊主（てこぼうず）など、地元の菓子店にしか作れない商品を作っていきたいです。太鼓坊主は、外はパイ生地、中の餡は、普通は紫芋の餡にするところ、黒胡麻の餡を使っています。」

夏場はゼリーがお勧めです。蒲生の大楠を使った焼酎ゼリー、紅茶ゼリーなど、各種揃えています。」



お得なケーキ・バイキング

ケーキ・バイキングもされていますね。毎月第3木曜日に、女性は1,300円、男性は1,600円（税抜）で店内のショーケースにあるものがすべて食べ放題（1時間以内）。甘党には大変魅力的です。

「経営的には完全に赤字の取り組みです。だから月1回で勘弁してください、ということにさせてもらっています。市外から来られる方がほとんどです。これまでに女性では最大18個、男性では25個食べた方がいます。」

予約制にすることで、お客さんが重ならないように配慮しているという。つまり、ケーキ・バイキングの間は貸し切りのような形になる。景色を楽しみつつ、好きなだけお菓子を堪能することができるわけだ。

店内では定期的に田園コンサートも開催している。音響の整備もご自身で設営されたほどの力の入れようだ。

「自分自身が何か楽器ができるわけではありませんが、ライブを聴くのが好きなので、誰がしてくれるというあてはなかったのですが、そのときのためのスペースは用意しておきたいと思い、こちらに店を構えたときから準備していました。」

「ものづくり」が好き 自作の移動販売車

浩幸さんは、学生時代はサッカー中心の生活をされた一方、絵を描いたり、音楽を聴いたりなど、多趣味ですね。

「ものづくりが好きなんですよね。移動販売車も自分で作るんです。先週は、人に頼まれて作った分を納車しましたよ。」

移動販売車の他、店舗の屋根や看板、ホームページ、庭の植樹などすべて自分でされているという。

「週末は移動販売車を使っているいろんなイベントに出ています。移動販売車のときはソフトクリームとソフトドリンクに特化した販売をしています。

最初は、移動販売でケーキを売ろうと考えましたが、車のブレーキをかけたならショーケースのケーキがどうしても倒れてしまうんですよ。」

移動販売車での営業も順調に伸びているようで、現在は店舗での販売との両輪の経営になっている。



感謝の気持ちを忘れずに

サッカー中心だった学生時代、社会に出てからは菓子職人としての厳しい鍛練を積んだ浩幸さん。その穏やかな語り口からは予想できなかったお話を本日伺うことができた。

これまでさまざまなことを経験してきた浩幸さんに、普段から心がけていることを尋ねた。

「感謝ですね。だって、うちに来てくれるお客さんというのは、ついでに立ち寄ったお客さんではないんですよ。「わざわざ」うちに来てくれたお客さんなんです。うちに目的があって来てくれるお客さんがほとんどです。感謝しかありません。ありがとね、こんな田舎まで来てくれてという気持ちです。



家族にも感謝。僕を育てて、ときには怒ってくれた福岡の洋菓子店の社長にも感謝。サッカーの監督にも感謝。

その感謝に応えるために僕ができるのは、ここで一日景色を眺めながらゆっくり過ごす時間を提供できるようにがんばることです。」

ピクチャー・ウィンドウとして設計された窓から、一面の緑を太陽が満遍なく照らしているのを眺めつつ、浩幸さんは仰った。今後も「茶句庭ながの」様の活躍を応援していきたい。

お問い合わせ

〒899-5303

鹿児島県始良市蒲生町北266-1

茶句庭ながの

電話 0995-52-0013

FAX 0995-52-0021

Email : office@sakunaga.com

<http://www.sakunaga.com>

取材者

〒899-5492

鹿児島県始良市宮島町25

始良市役所 商工観光課 商工振興係

電話 0995-66-3145